

ミューズ No. 38 平和のための博物館・市民ネットワーク通信

発行：2017年11月

編集：安齋育郎、山根和代

イラスト：戸崎恵理子

事務局：戦争と平和の資料館ピースあいち 宮原大輔

住所：〒465-0091 名古屋市名東区よもぎ台 2-820

Tel & Fax: 052-602-4222

平和のための博物館・市民ネットワーク全国交流会のご案内

第16回平和のための博物館・市民ネットワークの交流会を京都の「立命館大学国際平和ミュージアム」で以下のとおり開催します。今回は、立命館大学国際平和ミュージアムの平和教育研究センターとの共催による特別講演会も開催されます。みなさま、ぜひご参加ください。

～全国交流会～

日程：12月9日（土）、10日（日）

会場：立命館大学 国際平和ミュージアム
2階会議室

○1日目（12月9日（土））

13：00～ 受付開始

13：30～ 主催者報告（進行：平和のための博物館市民ネットワーク）

13：45～ <特別講演>

テーマ：ダークツーリズム

講師：井出 明先生（追手門学院大学経営学

部教授 社会情報学専攻）

司会：安齋 育郎氏（立命館大学国際平和ミュージアム名誉館長）

*一般公開（平和教育研究センター主催）

15：45～ <休憩>

16：00～ 各館報告（進行：平和のための博物館市民ネットワーク）

18：00～ 懇親会（進行：平和のための博物館市民ネットワーク）※場所：カルム（衣笠キャンパス 末川記念会館 B1）

20：00 解散 ※遅くても20：30までには退出。



erico

○2日目 (12月10日 (日))

9:00～ 開 場 (1F ロビー)

9:10～ 受付開始 (2F 会議室)

9:30～ 報告のつづき (進行: 平和のための博物館市民ネットワーク)

※報告者は事前にお申込の上、各自プリント 50 部ご用意下さい。

11:45～ 意見交換 (進行: 平和のための博物館市民ネットワーク)

来年の開催について
会計・事業報告

～12:30 解 散

※各自で移動・昼食

14:00～ フィールドワーク (進行: 平和のための博物館市民ネットワーク)

場所: 京都市鉄道博物館

フィールドワークの見どころ

京都は原爆投下の第 1 目標でしたが、約 1 万メートル上空から投下する目標は、京都駅の西 1 キロメートルほどのところに位置した梅小路蒸気機関車区の転車台だったと伝えられている。鉄道博物館の敷地には、この転車台がある。



～16:10 解 散

※ミュージアム見学について

※1 日目午前に立命館大学国際平和ミュージアム常設展および秋季特別展「儀間比呂志版画展—沖縄への思い—」をご見学いただくことができます。ご希望の方は、当日受付にて名札を受取り、それを各窓口にてお見せ頂ければ無料見学になります。

※ミュージアムの周辺MAP



☆参加申込方法

○交流会参加費用: 500 円 (講師謝礼などのため参加費を集めさせていただきます)

○懇親会会費: 約 3,000 円 (飲み物代込み)

○宿泊の手配は個人でお願いいたします。京都の宿泊は込み合いますので、早めのご対応をお願いします。

『10 周年記念誌』を発刊して

山梨平和ミュージアム 理事長 浅川 保

2007 年 5 月、甲府市朝気に、山梨平和ミュージアム (YPM) が開館して 10 年経ちました。この 6 月には、孫崎享氏を講師に

10周年記念講演を行いました。



この10年間の活動を振りかえり、今後の糧とするために、YPMは9月、記念誌『「平和の港」10年のあゆみ』を発刊しました。A4カラー版110頁で、常設展示等を紹介したグラビアから始まり、第1章 開館に至るまで、第2章 常設展示と企画展示、第3章 「平和の港」の多面的な取り組みの3章から成っています。

この中で第3章は、これまで10年間の記念講演、毎月の講演会などの企画行事、石橋湛山シンポジウム、石橋湛山平和賞などを、新聞記事等をもとに網羅的に記録したもので、この10年間のYPMの活動の歩みをたどることができます。

例えば、記念講演では、2008年6月は、安斎育郎氏の「地域から平和の創造を一平和博物館運動を通して平和国際貢献を」、2010年6月が、井出孫六氏の「戦争を問い続けて一過ぎ去れない過去」、2016年6月が、澤地久枝さんの「歴史に学び、現在を生きる」などで、本書によってそれらの貴重な講演の概要を知ることができます。

また、隔年ごとに行ってきた、石橋湛山シンポジウムでは、湛山研究の第一人者、立正大学特任教授の増田弘氏、岡山大学教授の姜克實氏等の講演の概要などを知ることができます。

『「平和の港」10年のあゆみ』は、1部1200円で、現在、好評発売中です。希望者は、甲府市朝気1-1-30 山梨平和ミュージアムまで。

満蒙開拓の「被害」と「加害」の両面を伝えて

満蒙開拓平和記念館 副館長 寺沢秀文

かつての旧満州(中国東北地方)に全国各地から約27万人という農業移民を送り出した満蒙開拓の史実を伝え、そこにおける「被害」と「加害」の両面に向き合い、そこから戦争の悲惨さ、平和の尊さを伝えていこうとする当館もお陰様で開館からもう4年半。民間運営という財政的な厳しさ等はあるものの、逆に民間運営であることを活かし、難解なテーマをなるべく判り易く、同じ市民目線で伝えていこうとする当館の姿勢等に共鳴して頂ける方も多く、信州の山奥という不便な立地ながら、年間3万人近い方に全国各地からご訪問頂いています。記念館を支えてくれるボランティア組織「ピース Labo」も新たな担い手、次世代の語り部等として順調に育ちつつあります。昨年11月17日には、天皇・皇后両陛下がその「強いご希望」によりご来館、その影響もありこの1年間、来館者数も増えました。天皇の戦争責任等に対する様々なご意見等

にも配慮しつつ、これまで通り、ぶれずに満蒙開拓の史実を伝えていきたいものと思います。「旧満州」の国防の一端を民間人主体の開拓団に担わせようとした国策がかつてあったことを忘れず、例え国策であっても「おかしいことはおかしい」と感じる感性を持った賢い国民であるためにも、「不都合な史実」としてこれまで語られることの少なかつたこの満蒙開拓という史実に学び、明日の平和に向けての教訓としていきたいものと思います。

アクティブ・ミュージアム「女たちの戦争と平和資料館」(wam)

館長 池田恵理子

「慰安婦」問題に取り組んできたアジア 8 カ国の市民団体は、昨年 5 月末、ユネスコ「世界記憶遺産」に「日本軍『慰安婦』の声」の登録を申請しました。国際諮問委員会による審査がこの 10 月にパリで行われましたが、日本政府が「分担金支払いの停止も辞さない」と登録阻止に動き、登録からは除外されました。各国と共同申請した wam を含む「日本委員会」では、ユネスコが日本政府の圧力に屈したことは極めて遺憾であるとコメントを発表し、「国際連帯委員会」での検討を準備しています。

■近年、日本政府は右派のメディアや右翼団体と共に益々声高に「慰安婦」を否定するようになってきたため、wam は国内外の市民団体と力を合わせて、こうした動きに対抗しています。この 7 月からは毎月 1 回、ソウルの水曜デモに連帯して新宿西口で

「水曜行動」を行い、街頭で「慰安婦」問題の解決を訴えています。8 月 14 日は韓国の金学順さんが 1991 年に初めて「慰安婦」被害を名乗り出た日なので、この日を国連の「慰安婦」メモリアル・デーにしようと、国内外でイベントを開催しました。wam では独自企画として、エントランスに肖像写真を掲げた 179 人の被害女性の名前を読みあげ、亡くなった方々に白い花を 1 輪ずつ添える「追悼のつどい」を行い、多くの支援者が集まりました。

■4 月 1 日には wam 主催で第 1 回日本軍「慰安婦」博物館会議を開催しました。韓国、フィリピン、中国、台湾、米国、東ティモール、日本の 7 カ国の「慰安婦」博物館が参加し、300 名を越える参加者とともに、「慰安婦」の記録と記憶の保存・継承のための情報共有と活動報告、今後の展望を語り合いました。

■wam では 2015 年度からアーカイブズ事業を開始し、パイロット・プロジェクトを進めています。資料保存・整理・デジタル化は時間と人手のかかるたいへんな作業ですが、幸いなことに募金やボランティア・スタッフも集まり、作業は順調です。

公文書の管理や処分が極めて恣意的に安易に行われてきた日本では、国家による人権侵害の記録保存は重要課題です。そこでこの 11 月 3 日にはアメリカからアーカイブズの専門家を招き、日本の専門家たちと共に「公文書管理と草の根アーカイブズ」の国際シンポジウムを開く予定です。

■8 月 5 日からは、『日本人「慰安婦」の沈黙~国家に管理された性』をテーマに特別展を始めました。証言も情報も限られていた日本人「慰安婦」には関心も高く、熱心な来

館者が増えています。この特別展は、新宿・新大久保の高麗博物館が開催している、朝鮮人女性が動員された全国各地の産業慰安所の「慰安婦」展との連携企画でもあります。両館の来館者には入館料を割引、相互見学会も行っています。

第五福竜丸の絵画展ひらく

第五福竜丸展示館 事務局 蓮沼佑助

第五福竜丸は今年で建造から 70 年目を迎えました。木造船の〈古稀〉を祝って、第五福竜丸展示館では「この船を知ろう」「この船をつくろう」と特別展を企画してきました。11月3日から始まった特別展は「この船を描こう」と題し、画家の男鹿和雄さんから贈られた絵画作品 5 点、そして全国の子どもたちから寄せられた第五福竜丸の絵 60 点を展示しています。

男鹿和雄さんは美術監督としてスタジオジブリ作品などを多数手掛け、樹と森の画家としても知られます。今回制作くださったのは、東京・夢の島の森の中にある福竜丸を描いた「森の第五福竜丸」、大漁を願って航海する「海の第五福竜丸」、「ビン玉」「六分儀」「焼津港」の 5 点です。

11月5日に行われたオープニングには男鹿和雄さん、元乗組員の大石又七さん、女優で原爆詩の朗読を手続ける吉永小百合さんが登壇し挨拶を述べました。会場には絵を描いた子どもたちも大勢駆けつけ、吉永さんは「今日の体験をお友達に話してくださいね。第五福竜丸のことをもっともっとたくさんの人に知ってもらい、核兵器が世界

中からなくなる日を私たちの力で一歩ずつでも実現させましょう」と語りかけました。この展覧会は来年 3 月 25 日までです。

〈第五福竜丸建造 70 年記念特別展〉

「この船を描こう 森の福竜丸 男鹿和雄と子どもたちの絵」

2017 年 11 月 3 日（祝・金）～2018 年 3 月 25 日（日）



子どもの「驚きと不思議さの発見」を掘り起こすーピースあいち企画展「戦争の中の子どもたち」ー

ピースあいち 丸山 豊

「ワッすごい」「なんだろう」「どうして」といった子どもたちのつぶやき、来館する子どもたちの声を聞き、引き出すこと、私たちはこれらを心掛けているだろうか。説明が多すぎないだろうか。

実は学校の授業も同じである。子どもが考えるより教師が伝えたいこと、教えたいことが優先してしまう。子どもが自分で考えるとき教科書は邪魔になる。授業の流れ

は「ナゾ解き」が基本、教師たちはそのため
に発問や教材開発に苦しんでいる。

平和博物館が「子ども展示」に取り組むな
ら「考える展示」が発点となる。この課題
はとても難しい。

ピースあいちでは毎年二～三学期にかけ
て子どものための企画展を開催してきた。
今年は学童が国民学校の日常と行事を描い
た絵「戦時中の児童画 子どもたちのくら
し」(岐阜県鵜沼国民学校 5年女子組 1944
年) 22枚を展示している。その中から来館
した子どもが思わずつぶやくであろう絵を
紹介したい。

「子どもたちが桑の枝から皮を引き裂いて
いる絵」だ。私自身「何、コレ」と驚いた。
来館した大学生に聞くと「桑の木」を見たこ
とがない。桑と養蚕、製糸は知識としてある
が桑の皮をなぜ引き裂くのだろうか、何の
ため、とキョトンとしていたので「これで服
を作った」というとびっくりしていた。当
然、「どんな布、誰のために、なぜ」と関心
が広がる。

当時「スフ」とよばれた人工繊維(当時は
スフ＝ステープルファイバー)の原料とし
て桑の皮を供出させたこと、スフ繊維の衣
服は一度洗濯するとヨレヨレとなり使用に
耐えないほど悪質で不人気だったことを説
明した。この時はこれで終わったが、あとで
「木綿よサヨナラ 我にスフあり」から考
えさせればよかったと後悔した。

1938年(昭和13)年6月29日 大阪朝
日新聞の記事を併せて提示したらもっと深
まっただろう。見出しが当時の標語「もめん
よ サヨナラ!」「我れ(マ)にス・フあり」

なのだ。

この絵と新聞記事からを、優れた生地であ
る木綿は、軍、兵士に使われ、銃後の国民
は着られない、つまりサヨナラさせられた
ことに気づくはず。木綿は兵隊さんのため、
私たちはスフで我慢する、つまり「欲しがり
ません」となる。

「誰が桑の皮を集めたのか」と絵に戻り、
全国の児童は桑の皮集めを強制的されたこ
とを学ぶ事もできる。むしろ「イナゴ取り」
の絵より銃後の子どもの様子が伝わる。

子どもの「つぶやき」「ナゾ」が生まれる
展示とは何か、大きな検討課題になってき
た。



Tree Angel by Pegge Patten

立命館大学国際平和ミュージアム

専門委員 山根和代

世界報道写真展 2017—WORLD PRESS PHOTO 17— 変えられた運命

オランダで毎年開かれる「世界報道写真
コンテスト」では、世界各地の125の国と
地域から約5千人のプロカメラマンが参加

し、8万点を超える応募がありました。その中から選ばれた8部門45人の受賞作品を紹介する「世界報道写真展2017」を開催しました。トルコのブルハン・オズベリジ氏が、首都アンカラで開かれた写真展の開会式にて、警察官が駐トルコ・ロシア大使を射殺した事件を捉えた大賞作品のほか、イスラム国（IS）の恐怖と食糧難によってやむなく郷里を去り、避難民キャンプで過ごさざるを得ない子どもの姿や、リオデジャネイロ・オリンピックの決定的瞬間をとらえた作品、放置された漁具により生命が脅かされるウミガメの姿など、普段目にすることがない世界の現状を伝える写真を紹介しました。

立命館大学国際平和ミュージアム開館 25周年記念 2017年秋季特別展 「儀間比呂志版画展 ー沖繩への思いー」

会期：2017年11月1日～12月23日

1923年沖繩に生まれた儀間比呂志氏は、1940年から北マリアナ諸島テニアン島で過ごしました。1943年に帰国し、その後出征。配属先の横須賀で敗戦を迎えました。戦後の混乱の中、アメリカ軍政下の沖繩へは戻らず、復員列車の終点であった大阪に居住。1946年から6年間、大阪市美術研究所で油絵を研修後、上野誠に木版画を学び制作活動を始めました。1956年には13年ぶりの沖繩で最初の個展を開き、以後定期的に開催。沖繩への取材を重ねながら、人々の暮らしや祭の姿など故郷沖繩の風景を作品にしました。

1970年以降は、作品の普及や力強い表現力を求め木版画に専念。この頃、住民の証言記録に接し、沖繩戦を描くようになりまし

た。

数々の画集や絵本の出版、日本各地で開催した展覧会を通じて作品を発表し、2017年4月に亡くなるまで沖繩への思いを伝え続けました。

本展では、2016年に寄贈された奥田豊氏の旧蔵コレクション68点を紹介し、沖繩返還から45年を迎えた本年に、沖繩戦と戦後の沖繩が直面する課題に私たちがいかに向き合うべきかを考えます。

岡まさはる記念長崎平和資料館

事務局長 崎山昇

昨年、高實前理事長が体調を崩されて以来、来館者への対応（見学案内、講演、フィールドワークなど）については理事会として対応しています。高實さんがいかに多くの仕事をされていたかがわかります。今年は7月22日に「第2回岡正治さんを語る会」を開催しました。高實さんが亡くなられて初めてで、高實さんが岡さんについて語っている映像を見たあと参加者で意見交換を行いました。また、昨年ドイツで交流した3人が来崎し、8月2日にドイツにおける核兵器反対運動をテーマに、市民平和運動団体「広島連合＝ハノーヴァー」のハイデマリー・ダンさんの講演会を行いました。8月22日から26日にかけて、新海智広副理事長を団長に、大学生2人や私を含む9人で「韓国に学ぶ旅」に出かけました。日本軍「慰安婦」問題など日本の植民地支配における韓国の被害の状況について学ぶ、教育の場でのように教えられているかを知るため教

育者と交流することなどを目的としましたが、現地で多くのことを学ぶ旅になりました。10月15日には南京大虐殺80年の企画として、松岡環監督ドキュメンタリー映画「太平門 消えた1300人」の上映会を行いました。

ひめゆり平和祈念資料館

学芸課 前泊克美

5月以降は、外部との関わりを持ちながらの事業やイベントが多くありました。

当館職員3人が執筆者として加わった『沖縄県史 各論編 6 沖縄戦』刊行シンポジウムや「マブニ・ピース・プロジェクト」シンポジウムなどへのパネリストとしての登壇、夏休みの研修受入やイベントなど、あっという間に今年度の上半期が終わった気がします。

8月には、夏休み特別企画「ひめゆり学徒の戦争体験講話」を行いました。「体験者の生の声を聞きたい」という来館者の要望は根強く、夏休みということもあり多くの方がご参加下さいました。証言員(元ひめゆり学徒生存者)の年齢を考えると、近年は「今度が最後かも・・・」と思いながらの開催です。職員による「平和講話」にもご家族連れの姿が多く見られました。夏休みを機会に戦争をテーマにした自由研究を、という子どもさんもいらっしやったようです。その他「教員向け講習会」の実施、教職員研修や沖縄県主催の「ウチナージュニアスタディ事業」(海外の沖縄の子弟の学習事業)の受け入れなどを行いました。9月には平和ガ

イド団体「沖縄平和ネットワーク」からの要望で、ひめゆり学徒隊に関連する壕(山城本部壕)について学習会を実施しました。様々な年代の来館者、受講者の熱意ある姿に、身が引き締まる思いになりました。



ジュニアスタディツアー：海外の沖縄の子弟が来県し、歴史や文化を学ぶ「ジュニアスタディツアー」。ひめゆり資料館で沖縄戦を学び、ワークショップを通して意見交流を行いました。

10月からは修学旅行シーズンを迎え、毎日多くの高校生たちが入館し、フレッシュな空気を感じつつ、職員はその対応に追われています。もはや高校生たちは2000年代生まれですが、少しでも沖縄戦のことを知ってもらうきっかけになってくれたらと思っています。修学旅行シーズンは12月まで続きます。

また、前回もご紹介しましたが、いよいよ12月1日より、企画展「戦争体験を未来につなぐーヨーロッパ平和交流の旅・ひめゆりの次世代継承の現在」がスタートします！4月に出席した国際平和博物館会議やヨーロッパ視察の報告とあわせて、当館の次世代継承の取り組みについてご紹介します。次世代継承の取り組みについて、展示のかたちでご紹介するのは初めてのことです。現在担当が鋭意準備中です。沖縄にいらっしやる機会がありましたら、ぜひお立ち寄

り下さい。

Tel:098-997-2100 Fax:098-997-2102

HP <http://www.himeyuri.or.jp>

FB

<https://www.facebook.com/HIMEYUIR.I.P.EACE.MUSEUM/>

広島・長崎原爆展、なんとベトナムハノイで開催される。

日越大学 桂良太郎

2017年9月25日、ベトナム国家大学ハノイ人文科学大学で広島長崎原爆展が開催されました。

開会式には、ファム・クアン・ミン学長の挨拶につづいて、梅田日本大使から挨拶があり、その後主催者の智多正信国立長崎原爆死没者追悼平和祈念館館長と、長崎の原爆被害者である森田博満長崎平和推進協議会継承部会員の挨拶がありました。開会式には、インドネシア、オランダ、カナダ、スリランカ、チェコスロバキヤ、ニュージーランド、フィンランド、ベルギーなど各国の大使、在留邦人、学生など多くの方が集まり関心の高さがうかがえました。

原爆展は11月5日まで開催され、原爆に関する多数のパネル、被爆体験記、折り鶴などを展示されています。

ベトナムは長きにわたり幾多の戦火を乗り越えて平和を達成した国であり、日本とベトナム両国がこのような「原爆展」開催によって、ますます「平和の尊さ」を世界に発信することに貢献することができました。

ベトナム「ソンミ村(My Lai)」虐殺祈念館式典(2018年3月16日)にご参加を！

日越大学 桂良太郎

2018年3月16日、ベトナムのダナン市の郊外にある、虐殺事件で有名な「ソンミ村」にて、虐殺記念館主催の「追悼式展」が地元の人々と開催される予定です。この機会に、ぜひソンミ村事件にご関心のおありの会員の皆様方、ぜひお越し下さい。このプログラムは目下、ホーチミン市にある戦争証跡博物館の元館長の Ms. Huynh Ngoc Van 館長が呼びかけ人となって、韓国ノグレンリ国際平和財団理事長の Dr.Chung Koo Do 氏と日越大学の桂良太郎が企画運営しているプログラムです。「広島・長崎」と「ノグレンリ及び済州島」、そしてこの「ソンミ村」は戦争時に多くの人々が虐殺された地でもあります。これらの3つ館同士の交流を深め、3か国間の平和構築に今後寄与できればと思っています。そしていずれはそれに中国の南京虐殺記念館（侵華日軍大屠殺遇難同胞記念館）も将来加え、アジアから平和を世界に発信できれば幸いです。（詳しい問い合わせは日越大学桂良太郎まで）

E-mail : roykatsura@gmail.com

展示の貸し出し：沖縄の写真展

沖縄平和サポート 稲葉博

3年前より全国ですでに100カ所近くで開

催していますが、新しい辺野古の状況写真も含めて、いまも全国に広めています。座り込み参加者たちの写真展です。ここに展示されている写真は、辺野古、高江の新基地建設反対の座り込み抗議に参加した人たちが撮ったものです。辺野古はゲート前の座り込みが始まった 2014 年 7 月から、高江は 2016 年 7 月 22 日からのものです。

ともに政府により新基地建設が強引に押し進められ、それにあらがう沖縄県民や本土からの支援者たちが座り込みに参加する中、それぞれの視点、思いを込めて写し取った現場のようすです。

日本に民主主義があるなら、地方自治が尊重されているなら、7 割以上の県民が反対している米軍基地など造られるはずはありません。それが沖縄では当たり前のように起こっています。その事実を写真から汲み取ってください。

辺野古、高江ともに豊かな自然の宝庫です。辺野古のジュゴン、サンゴ類、高江のヤンバルクイナ、ノグチゲラなど絶滅危惧種に指定されている動植物は数百種に上ります。世界的に見ても生物の多様性に富んだ貴重な海と山です。

70 年前、悲惨極まる地上戦を味わいながらも、豊かな自然の恵みに助けられ、生き長らえてきた沖縄県民にとっては、軍事基地など造ることはもっとも嫌むべきことではないのでしょうか。いまも米軍による騒音や犯罪、事故で苦しめられている人々にとってはなおさらのことです。

ふたたび、みたび沖縄は日本政府から見捨てられようとしています。ぜひ、同じ国民としてこの事実を見つめ、沖縄が基地の島として苦しみ続けぬようお力を貸してください。

「勝つ方法は決して諦めぬこと」——新基地建設に反対するわたしたちの合言葉です。わたしたちは沖縄のこの不条理極まりない事実を国内外に発信し続けます。」・写真は主に座り込み参加者たちが撮ったもので、全部で 200 枚以上あります。

貸出し料は 100 枚までなら 1 万円、200 枚なら 1 万 5 千円となっています。送料(片道 1800 円ぐらい) はご負担願います。

保険の対象になる写真群ではないので、保険は入っていません。貸し出す期間は 1 日から 10 日間を基本としています。それ以上長く借りたい場合はご相談に応じます。



写真はラミネートフィルムで装丁。それぞれ短いキャプションをつけています。日・英・中・韓の 4 カ国語のものもあります。写真サイズは A3 がほとんどで、地元沖縄の新聞の特集号や上空写真など (10 枚ぐらいあり) は A2 となっています。それら写真 (200 枚) が 3 セット用意されています

ので、ご希望の期間に1セットを、お貸しできると思います。森住卓さんほか写真家の作品も30枚ぐらいあります。これは1セットしかないため、空いていればお貸しできます。(森住卓さん、報道写真家。高江の米軍基地工事に反対する住民のドキュメンタリー的な写真を発表されています。)

写真は7つのジャンルに分けています

1. 残したい美ら海
2. ゲート前抗議行動
3. 機動隊の暴力
4. 海上抗議行動
5. 壊される海
6. 海保の暴力
7. 地元紙特集

それぞれ枚数は10~30枚ずつです。昨年大きなニュースとなった高江弾圧の様子の写真も60枚ぐらいあります。

プロの写真ではないので、展示は2段、3段でも構いません。ラミネートされた写真の4隅をピンで留める形となっています。5m四方の部屋であれば、衝立などを追加すれば100枚近く展示できると思います。

会場で取り扱いができれば、辺野古の米軍基地前のテントで販売している物販品もお送りできます。Tシャツ、書籍、パンフなどです。多少ですが還元金があります。

縮小した写真をサンプルとして10枚ほどお送りします。キャプションのサンプルも送ります。また、これらの写真をまとめ映像化したものが下記のユーチューブにあります。ご覧ください。

<https://www.youtube.com/watch?v=SBUgDvhcsU>

沖縄平和サポート

Tel.0980-55-2244

Fax.0980-55-2245

携帯 070-16296072

稲葉博

韓国のノグンリ記念館と済州島四・三平和記念館への研修旅行

立命館大学国際平和ミュージアム専門委員

山根和代

8月7日から12日まで韓国のノグンリ記念館(国際平和ミュージアムと学術交流を提携)と済州島の四・三平和記念館への研修旅行をしました。Peace Academyと呼ばれているが、今年で10年目です。10か国から27名が参加しましたが、北朝鮮のミサイル発射が影響して参加をキャンセルする学生がいました。

日本の近現代史を学んでいない学生にとって朝鮮戦争中のノグンリでの虐殺事件や済州島の4.3虐殺事件は衝撃的であったようです。しかし粘り強い真相究明や謝罪と賠償を求める活動を通して、そこは平和と人権の象徴となっていました。

歴史だけではなく、韓国の太鼓の実演や自然の美しい場所やお寺などを訪問し、自然や文化の理解もすることができました。

参加した学生の感想を聞くと、歴史的事件のあった現地への訪問によって、歴史を深く学ぶことができたと言っていました。単に知識を身に着けることができたということではなく、虐殺された人々の恐怖や悲しみを想像することができたようです。



ノグンリ平和記念館前で

日本やアメリカでは北朝鮮のミサイル発射に関連したニュースが多く、恐怖心や不安を煽るような報道が多いのですが、韓国ではそのような報道は自粛しているそうです。そのことからマスコミの報道への疑問を抱く学生もいました。

マレーシアでの APPRA 大会について

立命館大学国際平和ミュージアム専門委員
山根和代

アジア太平洋平和研究学会（APPRA: Asia Pacific Peace Research Association）が、8月23-25日にマレーシアの Penang にある Universiti Sains で開催されました。テーマは、“Promoting Peace and Upholding the Transcendent Dignity of the Human Person in the Asia-Pacific Region”で、15カ国から67名参加しました。同時にいくつか分科会が開かれましたが、参加したパネルや印象に残ったことなどについて報告します。

私は「平和博物館を通した平和教育」というパネルを組織し、パネリストは韓国の Dr.

Koo-do Chung (The No Gun Ri International Peace Foundation)、中国の Yuchao Wang (John Rabe Memorial at Nanjing University ボランティア学生で、現在アメリカの大学に留学中)、マレーシアの Professor Ahmad Murad Merican (Universiti Sains : 植民地主義に関する博物館)、アメリカの Professor Roy Tamashiro (Webster University : 韓国の済州 4. 3 事件の教訓)、そして日本では山根和代 (立命館大学: 日本の草の根の平和資料館の活動) でした。各館における平和教育について、交流をすることができました。マレーシアの参加者は今後平和博物館・植民地主義博物館を作ることに関心を持っていて、心強く思いました。

マレーシアで最も印象に残ったことは、異なった文化や宗教であるにもかかわらず、比較的仲良く暮らしていることでした。学校教育も、マレー人、中華系、インド系の異なった宗教や文化の子ども達がいっしょに学んでいるそうです。4月に北アイルランドのベルファストで国際平和博物館会議が開催されましたが、その時にカトリックとプロテスタントの居住地が「平和の壁」で仕切られ、従って子どもが通う学校も別であること、しかしいっしょに学校へ行く場合もあるが少ないと聞いていました。同じキリスト教なのにどうしてそれほど対立があるのかと思ったので、マレーシアでモスクにキリスト教の司教が行っていたのに、感動しました。

しかし、日本の植民地主義や第二次世界大戦中日本の侵略で多くの人々が殺され苦しんだことについて、日本人としては心苦しい面がありました。参加者は戦争博物館

を訪問する時間はありませんでしたが、第二次世界大戦中日本軍に殺された兵士の墓地 (Taiping にある) に行くことができました。参加者はその後平和公園を訪問し、植樹に参加することができました。歓迎会では、今後平和博物館を創る上で参考にしたいとのことで、四人の参加者が平和のための博物館について話す機会がありました。(第五福竜丸展示館について明治学院大学の高原孝雄教授、川崎平和館の暉峻僚三氏、アメリカのロイ・タマシロ教授、国際平和ミュージアムの山根和代) 今後マレーシアで平和博物館を創りたいということを知り、嬉しく思いました。

モスクを訪問する機会があり、そこでは食事を提供して下さいました。その代表である方が「私の父は日本軍の空襲によってここで殺されました」と言われ、胸が痛みました。その後彼に私は一日本人として、「日本が謝罪も賠償も個人レベルで行ってなくて申し訳なく思います」と述べると、「過去にばかり目を向けるのではなく、前を向いて生きていきましょう」と言われました。日本人を憎んでも不思議ではありませんが、彼の寛大さに深い感銘を受けました。

次の国際平和研究学会大会は 2018 年 12 月にインドで開催され、またアジア太平洋平和研究学会大会は 2019 年インドネシアで開催されるであろうと報告されました。APPRA 大会では、様々な平和研究者との交流や平和研究者のアジア・太平洋ネットワークを作ることができ、平和研究と平和教育の推進にとって良い機会でした。この大会報告に基づいて、今後本の出版が計画されています。

ノーベル平和センターと 日本の平和博物館の連携

立命館大学国際平和ミュージアム名誉館長
安齋育郎

2017 年 10 月 6 日、今年のノーベル平和賞が ICAN (核兵器廃絶国際キャンペーン) に授与されることが発表されました。翌日、平和のための博物館国際ネットワーク (INMP) 理事であるノーベル平和センターの Liv Astrid Sverdrup さんから INMP 役員にメールがあり、ノーベル平和賞授賞式の翌日 (12 月 11 日) から同センターで始まる ICAN 受賞についての展示に協力して欲しい旨の要請がありました。

執行理事の山根和代さんは、さっそく広島で被爆されたご尊父の体験や被爆 2 世としてのご自身の体験を踏まえた詩、被爆者の証言 DVD、ヒバクシャのピースマスクの展示、峠三吉や栗原貞子の詩、丸木位里・俊夫妻の「原爆の図」、ヒバクシャが描いた絵、原爆についての漫画など、多くのアイデアを伝えました。私 (安齋) は、立命館大学国際平和ミュージアムが収蔵する被爆資料を紹介し、あわせて、10 月 19・20 日には広島平和記念資料館、国立長崎原爆死没者追悼平和祈念資料館、長崎原爆資料館を訪れ、ノーベル平和センターの展示企画への協力を要請しました。

11 月 15 日、ついに Live Astrid Sverdrup さんが来日、京都と広島を訪れて合計 5 点の被爆資料を借り出すことが出来ました。長崎原爆資料館からは、被爆展示物を携えて広島平和記念資料館に来館して頂きまし

た。展示期間（2017年12月～2018年11月）が長いこともあって、貸出し可能な資料には制約もありましたが、結果として、長崎からはロザリオと腕時計、広島からはかばんと防空頭巾、立命館からは弁当箱が貸与され、Livさん自ら帰路に持ち運ばれました。



リヴ・アストリド・スヴェードルプさんを中心に立命館、広島、長崎の各博物館関係者（2017年11月17日、広島平和記念資料館）

今回の協力関係はINMPを通じて可能となったものであり、国境をこえた平和博物館のネットワークの有用性、重要性が改めて確認されました。今後、世界の平和博物館のネットワーキングを一層発展させることが期待されます。



貸し出される展示物を前にリヴさんと山根和代さん（立命館大学で、11月18日）

宇治川のほとりに詩人・尹東柱の 記念碑が建立されました

詩人 尹東柱 記念碑建立委員会
事務局長 紺谷延子

12年間の市民たちの努力の果てに、2017年10月28日、日本統治下の朝鮮から同志社大学に留学して治安維持法の犠牲になった詩人・尹東柱を記念する「詩人 尹東柱 記憶と和解の碑」が宇治川の白虹橋のたもとに建立され、除幕式が行われました。除幕式には、雨天にもかかわらず、尹東柱の遺族や、東柱がかつて在学した延世大学学長、同志社大学コリアセンター長、京都造形芸術大学学長代理、韓国総領事らをはじめ、市民200人以上が参加、記念集会にも建立委員会代表の安斎育郎氏（立命館大学名誉教授）ら多数が参加しました。

尹東柱は、母国語で詩を詠んだことなどが朝鮮独立運動への関与とみなされて京都府警下賀茂署が逮捕、京都地方裁判所で治安維持法違反の罪で懲役2年を言い渡され、収監された福岡刑務所で27歳の若さで獄死しました。



尹東柱

逮捕前、宇治川のほとりに知人たちとハイキングに訪れて飯盒炊爨を楽しみました

が、この時に撮影された姿が現存する最後の写真になりました。宇治市民はこのよすがを切り口に「記憶と和解の碑」を建立しましたが。宇治市民は、2004年に国連総会がナチスドイツが降伏した5月8日・9日を「第二次大戦のすべての死者に対する記憶と和解の時」と宣言したことを受けて詩碑建立運動に取り組み、内外の市民や研究者とも協力して今回の除幕式に漕ぎつけました。今後、この記念碑を拠点に、戦時の自由抑圧の反人権性を内外にアピールする企画が展開されることが期待されます。

運動の経過や成果と課題については、2017年12月9日・10日に立命館大学で開催される市民ネット全国交流会でも報告されます。



日本産。朝鮮半島産の石を左右に、中央上部に尹東柱を象徴する円柱があしらわれている(高さ2m、幅1.4m)。表面には、東柱の詩「新しい道」が日本語とハングルで刻まれている。

海外の平和博物館ニュース

「平和のための博物館国際ネットワーク(INMP)」通信の日本語版をご覧ください。下記のHPで読むことができます。

<https://www.inmp.net/newsletters-in-japanese/>

編集後記

『ミューズ』は「平和のための博物館市民ネットワーク」に関わる皆さんが、平和博物館について考えていることや、それぞれの平和博物館が取り組んだ経験や教訓やそこから明らかになった課題などを共有するための舞台です。編集委員の山根を中心に、多くのボランティアの方々の協力を得て英語版も作られ、“Muse”として世界にも紹介されてきました。今後も、翻訳に協力して頂けるボランティアの方々の助け借りて、この世界でも稀な営みを継続していきたいと願っています。編集者は、市民ネットの皆さんが本ニュースレターに積極的に投稿されることを期待しています。500字程度を目安に、出来れば1~2枚の写真を添えて原稿をお寄せ下さい。お待ちしております。